

常世国の存在位置と不老不死性の

関係についての一考察

勝 俣 隆

A Study on the Relationship between the Location and Immortality of *Tokoyo-no-Kuni* (A Land of Perennial Youth and Immortality)

Takashi KATSUMATA

常世国には、種々の性格が見出され、その全体像を浮き彫りにするのは容易な業ではない。

本稿では、上代文献に現われた常世国の複合的な性格の中から、その存在位置を検討し、常世国の本源的性格と思われる不老不死性とのかわりを考察してみたいと思う。

一、常世国の存在位置に関する諸説

常世国がどこに存在するか、どの方向に位置しているかについては種々の説がある。それら諸説をまとめると、次の四種になる。⁽¹⁾

- ① 海の彼方（特に方位については限定しない）
- ② 東方海上の涯、または東方の地

③ 南方海上の涯

④ 海の底、または地底

右のうち、①は、常世国へ海を渡って行くと記して文献が多いことから、当然導かれる結論である。

また、②については、柳田国男が、『海上の道』で、

東方の、旭日の昇って来る方角に、目に見えぬ蓬萊又は常世といふ仙郷の有ると思ふ考へ方は、この大和島根を始めとして、遠くは西南の列島から、少なくとも台湾の藩族の一部までに、今日も尚分布して居る。

と述べ、折口信夫が、「妣が国へ、常世へ―異郷意識の起伏」(『古代研究1 民俗学編1』所収)の中で、

過ぎ来た方をふり返る妣が国の考えに関して、別な意味の、常世の国のあくがれが出て来た。ほんとうの異郷趣味(えきぞちしずむ)が始まるのである。氣候がよくて、物資の豊かな、住みよい国を求め求めて移ろうと言う心ばかりが、彼らの生活を善くして行く力の泉であった。彼らの歩みは、富の予期に牽かれて、東へ東へと進んで行った。彼らの行くてには、いつまでもいつまでも未知之國が横たわっていた。その空想の国を、祖たちの語では常世と言うていた。

と記した点に端的に現われている。⁽²⁾

さらに、③については、例えば、谷川健一氏が、「他界観と宇宙観」(『日本民俗文化大系第二巻『太陽と月』)の中で、次のように述べられている。

日本人の原郷としての「根の国」が日本列島の外にあり、それは日本人の無限の係恋をかきたてる「妣の国」であったとすると、死者のたましいの住む国は、日本人の先祖が黒

潮に乗って南方の地域からやってきたという太古の移動の記憶とも重なりあう。常世の「常」は不断にという意味であり、「世」は古い日本語で稲や粟などの穀物をさす。したがって「常世」は穀物の常熟する場所を意味している。（中略）常世はそういう風に穀物や果物がいつもたわわに実っているゆたかな場所であり、それにはとうぜん南方の国々や海域が想定される。

つまり、日本人の原郷としての南方への憧憬、民族の太古の移動の記憶が、南方楽土としての常世を想起させたというのである。残りの④については、西郷信綱氏が『古事記註釈』の中で次のように説かれている。

そして書紀に国常立尊の亦の名を国底立尊というところのによつても分かるように、トコツクニはまたソコツクにでもありえた。現に万葉の浦島子を詠じた歌（九・一七四〇）では、海坂のかなたの海神の国を常世の国と呼んでいる。スクナビコナは、そういう大地の底に棲む祖霊の一種ではないかと私は考える。

右の如く、常世国は、その存在位置に関しても種々の説が存する。そこで、以下、上代文献の実際に照して、検討してみたいと思う。

二、常世国の東方性

常世国の用例は、記紀・万葉・風土記に、併せて二十八ヶ所三十八例ある。それらの中で、常世国の方位を暗示するものとしては、まず、伊勢国風土記逸文伊勢国号の条が挙げられよう。

天日別命 奉_レ勅 東入数百里 其邑有_レ神 名曰_二伊勢津彦_一 天日別命問曰 汝国献_二於天孫_一哉 答曰 吾竟_二比国_一 居住自久 不_二敢聞_レ命矣 天日別命 発_レ兵欲_レ戮_二其神_一 于_レ時 畏伏啓云 吾国悉献_二於天孫_一 吾敢不_レ居矣 天日別命問云 汝之去時 何以為_レ驗 啓曰 吾以_二今夜一起_二八風_一 吹_二海水_一 乘_二波浪_一 将_二東入_一 比則吾之却由也 天日別命 整_レ兵窺之 比_レ及_二中夜_一 大風四起 扇_二拳波瀾_一 光耀如_レ日 陸海共朗 遂乘_レ波而東焉 古語云 二神風伊勢国 常世浪寄国_一者 蓋比謂_レ之也

（圈点筆者。以下同じ。）

ここでは、伊勢津彦が、天日別命から天孫への国護りを迫まられ、一時の抵抗空しく、結局は、伊勢国から去っていく様子が描かれている。伊勢津彦は大風を四方に起こして「波に乗りて東にゆきき」と描写される。伊勢津彦が去った方向は東とするが、どこへ行つたかは明確に描いていない。しかし乍ら、すぐ後で、古語を引き、「神風の伊勢国」が「常世国の浪寄する国」であるというのは、このことをいうのだと解説しているのは、当然、伊勢国の東方海上に常世国があり、伊勢津彦は、伊勢国の東方にある常世国へ行つたのだという意味であると理解すべきであろう。

その一つの裏付けが、伊勢津彦が伊勢国を去るに当つての、「波浪に乗りて東に入らむ」「波に乗りて東にゆきき。」とある表現と言えよう。なぜなら、これは、記で、「御毛沼命は、波の穂を跳みて常世国に渡り坐し」とある記述、紀の「三毛入野命、……浪の秀を跳みて、常世郷に往でましぬ。」とある記事に、よく類似した描写だからである。「御毛沼命（三毛入野命）は、波（浪）の穂（秀）を跳（踏）」んで、常世国（常世郷）へ出かけたが、同様に、伊勢

津彦は、「波(浪)に乗りて東」(の海上遙かにある常世国)へ去って行つたと解釈され得るのではなからうか³⁾。

右の伊勢国風土記逸文の記事に拠れば、常世国は、神風の伊勢の国の東方海上遙かに、その存在が想定されることにならう。次には、常陸国風土記の総記に次の如き記述が見られる。

夫 常陸国者 界は广大 地亦緬邐 土壤沃墳 原野肥衍 墾発之處 山海之利 人人自得 家々足饒 設有下身勞二耕転一 力竭二紡蚕一者上 立即可レ取二富豊一 自然応レ免二貧窮一 況復求二塩魚味一 左山右海 植レ桑種レ麻 後野前原 所レ謂水陸之府蔵 物産之膏腴 古人云ニ常世之国一 蓋疑比地

右には、常陸の国が、物産に恵まれた如何に豊かな国であるかが綿々と綴られ、最後に、「常世の国といへるは、蓋し疑ふらくは比の地ならむか。」と、常陸の国を常世の国に比定して結んでいる。一種の比喩表現と考えればそれまでであるが、そこが常陸の国であることが、注意を喚起されることである。なんとすれば、常陸は、「日立ち」であつて、日の昇る東方を意味する地名だからである。さらに、常陸は、東路の道の涯であつて、東海道を東に進んで行つて、海に行き当るところの東の陸の涯なのである。名義の上からも地理的位置からも、「東」と密接な関連を持つ常陸の国が、常世国と同一視されることは、常世国そのものが、「日立つ国」として、東方と密接に係する存在たることを示していると考えられるのではないだろうか。

この常陸国と常世国の関連については、少し時代は下がるが、日本文徳天皇実録の斉衡三年(八五六)十二月の条にも、次の如き記事を見出し得る。

戊戌^九。常陸国上言。鹿島郡大洗磯前有レ神新降。初郡民有二煮^レ海為^レ塩者一。夜半望^レ海。光耀属^レ天。明日有二両恠石一。見在水次一。高各尺許。体於三神造一。非二人間石一。塩翁私異^レ之去。後一日。亦有二廿余小石一。在三向石左右一。似^レ若二侍坐一。彩色非^レ常。或形像二沙門一。唯無二耳目一。時神馮^レ人云。我是大奈母知少比古奈命也。昔造二此国一訖。去往二東海一。今為^レ濟^レ民。更亦来帰。

これは、大奈母知(大穴牟遲)と少比古奈命(少名毘古那命)が、石像として、常陸国の海岸に再出現した様を述べた一文である。

右の「少比古那命」は、「常世に坐す 石立たす 少名御神の」(記紀歌謡)等の記述によつて、常世国に坐す神としてよく知られている。また、古事記の大国主神の国作りの段では、「波の穂より天の羅摩船に乗」つてやつて来て、国作りの後、常世国に渡つた神として、「少名毘古那神」が明記されている。それ故、右の文徳天皇実録の記事で、少比古奈命が、「昔此の国を造り訖り、東海に去り往く。今、民を済んだために、更に亦来り帰る」神として描かれていることは、「東海に去り往く」という表現によつて、常世国が、常陸国の東海に在ることがすぐに帰納されよう。常陸国は、常世国への出入口の国として観念されていたことにもなるのである。

常陸国風土記と文徳天皇実録の記事も、常世国の東方性を示していると言える。

一方、神武天皇即位前紀戊午六月の条には、次のような記述が見られる。

遂越二狭野一、而到二熊野神邑一、且登二天磐盾一。仍引レ軍漸

進。海中卒遇三暴風一。……三毛入野命、亦恨之曰、我母及姨
並是海神。何為起三波瀾一、以淹溺乎、則踏三浪秀一、而往三平
常世郷一矣。

この例では、三毛入野命は、熊野から常世郷へ渡っており、紀伊国の熊野が、常世という他界への入口を考えられていることが知られる。

右の例だけでは、常世国の方位ははっきりしない。後世には、本州最南端に近いこの熊野の地は、南方海上遙かにあるとされた補陀落觀音浄土へ渡海する出発点の地ともされた。その意味では、熊野は、南方と関係深い土地とも言い得る。しかし、記紀神話の段階では、熊野には別の方位が関連付けられていた。それは、神武天皇即位前紀戊午年夏四月から六月にかけての、次の記事から読み取れることである。

時長髓彦……微之於三孔舎衛坂一、与之会戦、有三流失一、中
三瀨命眩暈一。皇師不_レ能_二進戰_一。天皇憂之、乃運_二神策於
冲杵_一曰、今我是日神子孫、而向_レ日征_レ虜、比逆_二天道_一也。
不_レ若、退還示_レ弱、礼_二祭神祇_一、背負_二日神之威_一、随_レ影压
躡。如_レ此、則曾不_レ血_レ刃、虜必自敗矣。……五月……進到
三于紀国龜山一、而五瀨命薨_二于軍_一。……六月……至_二熊野荒
坂津_一。……既而皇師、欲_レ趣_二中洲_一。

これは、「日神の子孫として、日に向ひて虜を征つ」こと、つまり、龍田や膽駒山を通って大和へ入ることが、西から東へ向かうことになって、日に向かつて戦うことになるため、それを「天道に逆れり」とし、「背に日神の威を負ひたてまつりて、影の隨に圧ひ躡みなむ」ことがよいとして、紀伊国の熊野から背に日の威光を負って大和へ向うことにした部分の叙述である。地理的には、

熊野は必ずしも大和の東とは言い難いが、この神武東征神話においては、熊野から大和へ向かうことが「背に日神の威を負ひたてまつ」ること、即ち、東から西へ進むことを意味していると考えざるを得ないのである。それ故、神話上の方位観にあつては、熊野は大和の東に位置すると観念されたのであろう。

三毛入野命が、熊野から常世郷へ渡るのも、熊野が東方を表わす地域と考えられ、同じく東方海上にあるとされた常世国に面している地点と観念されていたためであらうと推測されるのである。

なお、記では、

故、御毛沼命者、跳_二波穗_一、渡_二坐于常世国_一

とあつて、どこから渡ったのかは明記していないが、前後の文脈からすれば、御毛沼命は、日向から常世国へ渡ったと解すべきであらう。その場合、日向は、ヒムカシ（日向シ）から来た、本来東を意味する呼称であるから、常世国との関係は、先の常陸国の場合と同様に考えられよう。この点については、後述する。

以上の、伊勢、常陸、紀伊国の熊野、日向には共通点が見られる。

いずれも、地形的に東に海が開けた土地であつて、その土地自体が、東方世界という意味合いを色濃く持つており、信仰上の聖地として著明な神社があり、且つ、常世国への出入口と考えられていた地域である点である。

右の事実は、常世国自体が、やはり、東方海上に位置すると観念されていたことの証左とならう。常世国の存在する方向は、どの方位でもよいわけではなく、また、南方というよりは、やはり、東方と深い関係を持つと見るべきであつて、基本的に、東方海上

遙かの異郷であつたと理解すべきであろう。

それでは、常世国と東方性が如何に結びついたのでか、次節以下検討してみたい。

三、常世国と蓬萊

丹後国風土記逸文浦島子の条では、女娘が島子に、「君宜^三廻^レ棹赴^二于蓬山^一」と述べているように、島子の訪れた仙郷を「蓬山」と記し、「仙都」「神仙の界」とも述べ、さらに「常世（等許余・等許与）とも叙している。それ故、この「蓬山」が「トコヨノクニ」と訓まれてきたことから言えるように、この浦島子譚では、中国の神仙思想の理想郷たる蓬山、即ち蓬萊山と、日本固有の理想郷たる常世が、同一視されていることになる。この常世と蓬萊山の混同は、当時、かなり普遍的であつたらしく、雄略記二十二年秋七月の条でも、

丹波国余社郡管川人瑞江浦島子、乗^レ舟而釣。遂得^二大亀^一。便化^二為女^一。於是、浦島子感以為^レ婦。相逐入^レ海。到^二蓬萊山^一、歷^二觀仙衆^一。

とあつて、浦島子が訪れた「トコヨノクニ」（寛文九年板本訓）は「蓬萊山」と表記されている。

万葉集卷九、一七四〇で、同じ浦島子が訪れた先が、「常代」「常世」と表記されていることから見ても、蓬萊山と常世国の混同は明らかであろう。

ところで、何故、日本固有の常世国と中国神仙思想の蓬萊山は混同されたのであろうか。そこには何等かの共通点がなくてはなるまい。

そこで、中国神仙思想において、蓬萊山が如何に描かれているかを眺めてみることにする。

『山海經』海内北經には、

蓬萊山在^二海中^一。

とあり、『史記』秦始皇本紀には、

海中有^二三神山^一、名曰^二蓬萊、方丈、瀛州^一。

とある。右の二文献からは、蓬萊山が海中に存することがわかるが、その位置は未だ明確ではない。ところが、『列子』湯問篇には、

渤海之東……有^二三大壑^一焉……名曰^二歸墟^一……其中有^二五山^一焉、一曰岱輿、二曰員嶠、三曰方壺、四曰瀛洲、五日蓬萊。

とあつて、蓬萊山が、渤海の東に位置することが明記されている。蓬萊山は、中国の東海渤海のさらに東方海上にあるとされたのである。

そして更に、蓬萊山が、中国の東方海上にあるとされたことと、常世国が、やはり、日本の東方海上にあるとされたことが、常世国と蓬萊山が混同される大きな原因になったと思われるのである。

勿論、皇極天皇紀三年条の

祭^二常世神^一者……老人還少。

や、万葉集卷四、六五〇の

吾妹見者 常世国尔 住家良思 昔見從 変若益尔家利

さらに、万葉集卷九、一七四〇の浦島伝説に、

常代尔至……耆不^レ為 死不^レ為而 永世尔 有家留物乎

……とある如く、常世国は、不老不死の世界と考えられていたのはよく知られている通りである。

同様に、中国の方士たちが想像した蓬萊山も、仙人の住む不老不死の世界であつた。例えば、『列子』湯問篇には次の如くある。

五曰、蓬萊。其山高下周旋三万里。其頂、平处九千里。……珠玕樹皆叢生、華實皆有滋味、食之、皆不老不死。所居之人、皆仙聖之種、一日一夕、飛相往来者、不可数焉。

不老不死の觀念においても両者は混同される要素を有していたわけである。

また、垂仁天皇紀九十年——後紀条には、次の如き記事が見られる。

九十年春二月庚子朔。天皇命三田道間守。遣常世国。令求非時香菓。……受命天朝。遠往三絶域。万里踏浪。遙度弱水。是常世国。則神仙秘区。俗非所臻。

ここでは、常世国へ行くに当って、「遙に弱水を渡る」という記述が見られる点が注目される。弱水とは、『史記』大宛列伝正義注に、

弱水云有源二、俱出二女国北阿耨達山一、南流会三於女国一、東去レ国一里、深丈余、濶六十步、非二毛舟一不レ可レ濟、南流入レ海、阿耨達山、即崑崙山也。

とあり、『山海經』大荒西経に、

西海之南、流沙之浜、赤水之後、黒水之前、有二大山一、名曰崑崙之丘一、有レ神、人面虎身有レ文、有レ尾皆白、処レ之、其下有二弱水之淵一、環レ之。【郭璞注】其水不レ勝二鴻毛一。

と記され、さらに、『玄中記』に、

天下之弱者、有崑崙之弱水一、鴻毛不レ能レ載。

とあるところの、崑崙山の麓に位置する水域である。これに拠れば、弱水を渡って行き着く常世国は、崑崙山と同一視されているとも言い得よう。

しかし乍ら、『列仙伝』には、

謝自然、泛レ海求蓬萊一。一道士謂曰、蓬萊隔二弱水一三十三万里、非二飛仙一不レ可レ到。

とあつて、弱水を蓬萊を囲む水域と見る見方もあつたことが知られる。丹後国風土記逸文浦島子条や、雄略記二十二年秋七月の浦島伝説において、島子の訪れたトコヨノクニは、「蓬山」や「蓬萊山」と表記されていたのだから、紀の田道間守の段に登場する「弱水」は、蓬萊山を囲む弱水との関連でとらえた方が適切かも知れない。

この弱水の記述に見られるように、蓬萊山へ行くにも、常世国へ行くにも、軽いことの比喩である鴻毛さえも沈めてしまう弱水あるいは、それに相当する水域があるとされたのだから、その渡航困難な水域の涯にあるとされる点でも、常世国と蓬萊山は同一視される理由を有していたわけである。

上述の如く、日本古来の常世国と中国神仙思想の蓬萊山は、その東方性、不老不死、渡航の困難さ（弱水の渡河）などによって同一視されていたことが推測された。それ故、中国において、中国の東方海上遙かにあるとされた不老不死の理想郷蓬萊山の思想が日本に入ってくれば、日本から見ても、さらに東方の海上に、不老不死の理想郷蓬萊山があるものと、必然的に古代日本人は想像することになる。それ故、蓬萊山の思想が流入する以前に存在していた東方海上の理想郷常世国の觀念が、その方向と性格、渡航法の三要素の類似によって、蓬萊山と混同されるに至るのは

必然の成り行きだったと考えられよう。逆に言えば、東方海上にあるとされた蓬萊山と混同されたこと自体が、常世国が、本源的に東方海上に存すると観念されていたことを裏づける一つの証左になるとも言えるのである。

四、常世国と扶桑、ニライ・カナイ

蓬萊以外にも、常世国と深く関わるだろうと思われるものがある。その一つは、やはり古代中国人が、東方海上遙かに想定した日出づる場所、いわゆる扶桑である。

『山海経』海外東経には、

湯谷上有二扶桑^一。十日所^レ浴。九日居^二下枝^一。一日居^二上枝^一。

とあり、『淮南子』地形訓には、

扶木在^二陽州^一、日之所^レ曠。

と作る。さらに、『淮南子』天文訓には、

日出^二于暘谷^一、浴^二于咸池^一、拂^二于扶桑^一、是謂^二晨明^一。

一。登^二于扶桑^一、爰始將^レ行、是謂^二朏明^一。

と描かれ、『論衡』説日第三十二では、
儒者論【曰】、日且出^二扶桑^一、暮入^二細柳^一。扶桑、東方地、細柳西方野也。桑柳、天地地之際、日月党所^二出入^一之處。

と説く。

扶桑は、伝承により、東方の神木、あるいは東方の地の呼称とされているが、いずれにせよ、毎朝、東方遙か海から昇ってくる太陽を見て、そこに太陽の出入口としての一種の太陽故土が考

えられたのである。

説文解字が、「東」という漢字を説明して「日在木中」と述べているのも、扶桑伝説に基づくものと思われ、「東」と「日」の関係が如実に示されている。

しかし乍ら、こうした、東方海上遙かに、太陽の出現する世界があると考えたのは、何も中国人ばかりではなかった。

沖繩の『おもろさうし』には、次の如きおもろが見られる。

聞^{きこ}る中^{なかつ}城^{じやう} 東方^{あかあ}に 向^むかて 板^い門^{ちやう} 建^たて直^なちへ 大^だ国^{こく}
添^ぞう中^{なかつ}城^{じやう} 鳴^な響^{きやう}む中^{なかつ}城^{じやう} て^ただが穴^{あな}に 向^むかて (第二、42)
東方^{あかあ}の 明^あけもどろ 立^たてば 十^と走^しり 八^や走^しり 押^おし開^あけ
わちへ 見^み物^{もの} 清^{きよ}らや て^ただが穴^{あな}の 明^あけもどろ 立^たてば
(第二十二、1542)

右の「てだが穴」とは、太陽の出現する穴であって、おもろ人たちは、太陽が、東方の海の涯にある穴から出現するものと考えていたのである。

また、古代琉球の他界として有名なニライ・カナイも、その存在位置が、海の彼方とも、海底とも、地底ともされ、さらに、方位も東、西、北など様々だと言われているが、それでも、柳田国男が指摘した如く、基本的には、東の海の彼方に想定されたものではないかと考えられ、それは、やはり、東方からの太陽の出現と無関係ではあり得ないであろう。

こうして考えてくると、常世国は、東方遙かの海上にあると想像された点において、扶桑やニライ・カナイと、基本的には同種の他界であったと推測されよう。そして、どちらの場合も、東方の海の涯にあるということが、必然的に太陽との関係を連想させる。

そこで、次に、常世国と太陽の関連を見てみたい。

五、常世国と太陽浄土

先に、四節にわたって、常世国が東方海上遥かにあるとされてきた徴証を探ってきた。

本節では、それを基に、常世国と太陽の関連を探ってみた。垂仁記には、多遲摩母理が常世国へ渡ったことを記す有名な説話がある。

又、天皇、以三宅連等之祖、名多遲摩毛理、遣常世国、令求登岐士玖能迦玖能木実……是今橘者也。

また、垂仁紀九十年の条にも、

天皇命二田道間守、遣常世国、令求三非時香菓……今謂橘是也。

とあって、それぞれ、常世国に生えている、登岐士玖能迦玖能木実（非時香菓）を橘のこととしている。

橘は、万葉集卷六、一〇〇九の聖武帝御製歌に、

橘者 実左倍花左倍 其葉左倍 枝尔霜雖降 益常葉之樹

と歌われ、常緑のめでたい植物であることが賞揚されている。また、続日本紀天平八年十一月丙戌条でも、

橘者果子之長上、人所好、柯凌二霜雪一而繁茂、葉経二寒暑一而不彫。与二珠玉一共競光、交二金銀一以逾美

と、橘の枝葉が、常緑に茂り、その実は、珠玉や金銀にも劣らずに光って美しいことが述べられている。

それ故、登岐士久（非時）は、「その雪の時じくが如（不時如）」〔万葉集卷一、二六〕や、「時じくそ（時自久曾） 雪は降りける」

（同卷三、三一七）の「時じく」同様に、四時を定めず、常に同じ状態であること、橘であれば、常緑であることを讃えた表記ととれる。

「迦玖（香）」については、既に指摘されているように、「光り輝く」意を見出し得よう。

例えば、大系本竹取物語の補注の中で、校注者の阪倉篤義氏は、次のように述べられている。

上代の文献に見える火神の「軻遇突智の神」、あるいは光を意味する「加我よふ」「やそ河礙」「迦芸ろひ」など一連の語を考えると、これはもとやはり光りかがやくという意味で「カグヤ姫」と名づけたと考えるべきではなからうか。

それ故、この「迦玖能木実」も、「光り輝く木の実」の謂と考えることが可能であろう。

橘は、確かに、黄金色の実をつけるから、光り輝くというに相応しいのである。

ところで、松前健氏は、『日本神話の新研究』の中で、諸外国の神話を比較研究して、次の如く述べられた。

赤色や白色の物以外に、黄金や金色の物がまた太陽の象徴として考えられたことは、これも世界大なる信仰であった。……従って黄金の宝や玉を取りに行ったり、これ等を取って帰る

話の中には、可成り太陽神話的な色彩が濃いものがあるのである。

この論からすれば、橘たる登岐士玖能迦玖能木実（非時香菓）は、太陽の象徴であり得ることになる。

後世の例であるが、『曾我物語』に、時政の娘が、橘の夢を見る例が出てくる。

さる程に、その頃、十九の君、不思議の夢をぞ見たりける。たとへば、いづくともなく、たかき峰にのぼり、月日を左右の袂におさめ、橘の三つなりたる枝をかざすと見て……

この夢を政子が買つて、頼朝の子を設けることになる。

げにも、景行帝、橘をねがひ、誕生ありし事、幾程なくて、若君いできたり、頼朝の御後をつぎ、四海をおさめたてまつる。

橘のお蔭で、日の御子景行帝が誕生した如く、橘のお蔭で、日の本の支配者、頼家、実朝が誕生するのである。ここにも、橘の太陽象徴としての性格が窺われよう。

そしてその橘たる登岐士玖能迦玖能木実（非時香菓）が生えている常世国は、太陽象徴たる橘の本源地という意味で、太陽浄土の性格を持つと言つてもよからう。

また、記の天の石屋戸の段には、

集三常世長鳴鳥一、令レ鳴而、

という一節が見られる。この長鳴鳥とは鶏のこととされているが、何故、「常世の」という修飾語が懸るのであろうか。鶏は、言うまでもなく、太陽に関係深い鳥であり、日のわずかな光を感じて、夜明けの到来を告げる。逆に、鶏が鳴けば、太陽が出現すると考えるのも至極当然である。

それ故、この場合は、天石屋戸に隠れた太陽神天照大神を、鶏鳴によつて導き出す呪術と考えられるが、普通の鶏ではなく、常世国の長鳴鳥が集められたのは、常世国を太陽浄土と見なす考え方があったからと推測されるのでないか。つまり、かけまくも畏しき太陽神天照大神の再出現を促すには、太陽故土たる常世国の鶏でなくては効果が薄いと考えられたのではないか。

それ故、「常世の」の一句が「長鳴鳥」に冠せられた点も、常世国が太陽浄土と考えられたことの一つの例証と言えよう。

また、先にも触れたが、伊勢国風土記逸文において、「常世の浪寄する国」である「神風の伊勢の国」を治めていた伊勢津彦は、「中夜に乃る比、大風四もに起りて波瀾を扇挙げ、光耀きて日の如く陸も海も共に朗かに、遂に波に乗りて東にゆきき。」と描写されていた。「光耀きて日の如く」という一節は、伊勢津彦が「日の如く」光を発すること、端的に言えば、太陽そのものと言ひ得る光輝を有していたことを示すものと言えよう。太陽の如く光りながら、東、おそらく、東方海上にある常世国へ渡つたということは、常世国と太陽の関係を示す一例ではなからうか。

また、この伊勢国については、垂仁紀二十五年三月の条に次の如き記載が見られる。

離二天照大神於豊相入姫命一。託三于倭姫命一、爰倭姫命、求下鎮二坐大神一之处上、而詣二菟田筱幡一。更還之入二近江国一、東廻二美濃一、到二伊勢国一。時天照大神誨二倭姫命一曰、是神・風・伊勢国、則常世之浪重浪帰国也。傍国可・恰国也。欲レ居二是国一。故随二大神教一、其祠立三於伊勢国一。因興二斎宮于五十鈴川上。是謂二磯宮一。則天照大神始自レ天降之処也。

いわゆる伊勢神宮の起源譚だが、伊勢国は、太陽神たる天照大神が、「是の国に居らむと欲ふ」とのたまひ、その祠が建てられ、「天照大神の始めて天より降ります処なり」とされる、太陽信仰と深い関わりを持つ聖地である。二見ヶ浦を初めとする太陽遺跡も現存している。上述の如く、伊勢は東に海が開け、常世国への入り口と考えられた国である。太陽信仰と関わり深い伊勢が常世国への入り口とされたことは、常世国自体が、太陽信仰と深いか

かわりを持つ世界と観念されていたことを示すと見るのが妥当であろう。

また、日本文徳天皇実録の斉衡三年十二月の条に見られた、常陸国に押し寄せた少比古奈命の石像は、「夜半望^レ海。光耀属^レ天」。状態で現われている。「光耀が天に属ぶ」まで光った少比古奈命は、先の伊勢津彦同様、太陽との関連が連想され、それは同時に、少比古奈命のやつてきた常世国自体が太陽浄土としての性格を有することを示唆するものであろう。

さらに、記紀の神武東征神話において、熊野が東方的性格を持つことは上述したが、熊野から大和への導き手として八咫鳥（頭八咫鳥）が遣わされる。この八咫鳥も、太陽の象徴と見るのが一般的であって、熊野と太陽信仰のかかわり、延いては、熊野が入口たる常世国の太陽浄土的性格を暗示するものがある⁷⁾。

六、東方太陽浄土と不老不死性

前節までに、常世国が、蓬萊、扶桑、ニライ・カナイ等とかかわりを持つ他界であり、東方の海涯にある太陽浄土としての性格を持つことを見てきた。そのことと、常世国が、その名義の通り、常世、つまり永久不変の不老不死の世界であることは如何にかかわるのだろうか。

まず、常世国が、東方海上遙かに想定された点であるが、「東」は、洋の東西を問わず、光、春、青春、復活、誕生などの観念と結びついた方位とされてきた⁸⁾。これは、中国の陰陽道や、日本神話における方位観念にも、明瞭に見出される。

その一例として、「日向^{ひむか}」という地名を取り挙げてみたい。日向

で、まず想い出されるのは、伊邪耶伎の大神の身禊である。古事記では、

伊邪那伎大神詔、……吾者為^二御身之禊^一而、到^二坐^三坐^四紫日向之橘小門之阿波岐原^一而、禊祓也。

と描き、日本書紀神代上第五段一書第六では、

伊奘諾尊：当^レ滌^二去吾身之濁穢^一、則往至^三筑紫日向小戸橘之憶原^一、而祓除焉。

と作る。どちらも、日向で禊祓をし、その結果、古事記では、

於^レ是洗^二左御目^一時、所^レ成神名、天照大御神。

日本書紀では、

洗^二左眼^一。因以生神、号曰^二天照大神^一。

と、それぞれ、至上神である日の神天照大（御）神が誕生する。

日本神話で最も重要な神が、なぜ日向で誕生したかと言えば、日向が聖地と考えられたに他ならないであろう。そしてどうして日向が聖地かと言えば、日向という名義そのものが、日に向かうということ、他より優れた聖なる意味を持つからであろう。

事実、日本書紀景行天皇十七年春の記述では、

幸^二子湯泉^一、遊^二于丹蒙小野^一、時東望^二之^一、謂^二左右^一曰、是^二国也直向^二于日出方^一。故号^二其国^一曰^二日向^一也。

とあって、「是の国」が、「直く日の出づる方に向^{まむ}くゆえに、「日向」と名づけたとする。東方の日の出現する方向に開けた土地を善しとしたのである。

一方、逸文日向国風土記の国号の由来を述べた条には、

纏向日代宮御宇大足彦天皇之世、幸^二児湯之郡^一、遊^二于丹蒙之小野^一、謂^二左右^一曰、比^二国地形^一、直向^二扶桑^一、宜^レ号^二日向^一也。

とある。日本書紀と大体類似しているが、書紀の「日出方」を「扶桑」と記している点が注目される。扶桑は、四節でも見た如く、古代中国人が想定した、東方海上遙かの太陽故土であるが、この扶桑は、その存在位置から、常世国と混同される面が見られた。

実際、第五節の如く、常世国には太陽浄土としての性格が存するのだから、その点においても、扶桑と常世国は同一視されてもおかしくない。第二節で、御毛沼命が、日向から常世国へ渡って行ったことを述べたが、日向が、「直に扶桑に向か」つていれば、必然的に常世国へも向かうことになるから、日向が常世国への出発点となるのはよく理解できる。それ故、本来、日向とは、太陽の出現する聖なる地である扶桑や常世国に、海を隔てて真向いになった地で、そうした太陽浄土をお祭する場所であつたのだろう。聖なる浄土を祭る場所が、逆に聖なる空間そのものに変質して、祭られる場所になったのが、伊邪那伎の大神の身褌の場としての日向であろう。

また、扶桑が、『論衡』で、「東方地」とされ、説文解字で説く「東」の字の構成要素である如く、扶桑は、「東」と関係深い、「東」そのものを表わすといつても過言でない存在であつた。そして、その「扶桑」に「直に」「向か」う「日向」そのものも、「東」を表わす言葉であつたのである。例えば、大野晋氏は、

「ヒムーカーシ」は「日に向く方向」つまり東の意である。

と明言されている。⁹⁹つまり、「東」という語の基になった「日向」そのものが、「東」と同義と言つてもよく、「東」の持つ属性である「復活」「誕生」などの観念と分ち難く結びついていたのである。そして「復活」という概念は、一度死んだものが生き帰るこ

とであるから、「不死」という観念と、当然のこと乍ら、深く結び付くのであり、そこから、常世国が、東方海上遙かにあること自体が、「不死」の世界であることとつながってくるのだと言えよう。

一方、常世国が太陽浄土である点と不老不死は如何にかかわるのであるうか。

太陽のイメージやシンボルを、地球的視野で眺めた場合、汎世界的なものとして抽出できるのは、「永遠性、創造者、樂園、豊饒」などの観念との結び付きである。¹⁰⁰日本神話においても、常世国からやってきた少名毘古那神は、大穴牟遲神とともに国土を創成しており、また、常世国は、登岐土玖能迦玖能木実が実る樂園であり、豊饒の世界であつた。そして、当該の「永遠性」、つまり、「永久不変と不老不死性」も、常世国という語義そのものから抽出されるものであつた。すなわち、太陽浄土であること自体が、その太陽の持つ永遠性という属性によつて、不老不死という観念と強く結び付いていたことになろう。

また、五節で述べたように、常世国は、黄金色の太陽から連想される黄金色の実、橘の生える理想郷でもあつた。その太陽の象徴でもある丸い黄金色の登岐土玖能迦玖能木実は、それ自体がまた、不老不死の霊果であるという性格を持っていた。¹⁰¹それ故、不老不死の霊果でもある登岐土玖能迦玖能木実が生えている聖域であるという点からも、常世国は、不老不死の理想郷であることになるのである。そして、そのことは、太陽自体が、不老不死の象徴であることを示しているのに他ならないであろう。

結 び

以上、常世国の存在位置と不老不死性のかかりについて考察してきた。

結論としては、常世国は、東方海上遙かに存在し、太陽浄土としての性格を持ち、そして東方に位置することと太陽浄土たると自体が、東方や太陽の属性である復活や永遠性によって、不老不死性を生み出していることが判明した。

古代日本人は、毎朝、太陽が、東の海の涯から昇るのを見て、そこに、太陽浄土、すなわち、常世国を想像し、さらに、毎日、絶えることなく、新しい太陽が、東の海の彼方から昇る様子から、太陽の永遠の復活、更新、延いては、生命の不老不死を連想したのであろう。そこは、太陽の象徴であり、かつ不老不死の霊果である登岐土玖能迦玖能木実が、稔って輝いている、豊穰な、光明に満ちた理想郷であった。

この常世国と、中国の蓬萊や扶桑、沖縄のニライ・カナイなどの関係は、当然その類似性故に問題となるが、「常世（トコヨ）」という言葉が、日本独自のものであることを考えれば、先に東方太陽浄土、不老不死の理想郷としての常世があり、後にその性格の類似性によって、常世と蓬萊等が混同され、同一視されるに至ったものと考ええる。しかし、その混同自体は、記紀万葉の時代に遡り得る極めて早い時期に起こったものと言わざるを得ないであろう。

注

- (1) ①は、倉野憲司氏『古事記全註釈』、西宮一民氏『古典集成古事記』、西郷信綱氏『古事記注釈』等、多数の古事記の注釈書に見られる最も一般的なものである。②は、柳田国男や、折口信夫、三谷栄一氏等の論に見出される。③は、谷川健一氏「他界観と宇宙観」等に見られる。④は、西郷信綱氏『古事記注釈』の異説等の説である。

- (2) 但し、折口信夫は、『萬葉集辞典』の中では、「最古くは、海を隔てた土地として、海外にも海中にも其存在を考えてゐた様で、海を挟んで此国に遠い地は、皆、常世であつた」と述べ、①や④のような考え方も示している。さらに、「妣が国へ、常世へ」の中で、「しかしもう一代古いところでは、とこよが常世で、常夜経く国、闇かき昏す恐ろしい神の国と考えていたらしい」としているが、常世の「世」と常夜の「夜」は、上代特殊仮名遣いの甲類・乙類が異なるから、当然発音の異なる別種の語と考えられ、この説は採れない。

- (3) 「波の穂を跳む」と言つた行為が、常世国への渡航方法の一つであることは、拙稿「『波の穂を跳む』と『粟茎に弾かれて』の意図するもの——常世国への渡航方法に関して——」【『愛文』20号（愛媛大学法文学部国語国文学研究会）を参照されし】。

- (4) 紀神代上第八段第六の一書には、「其の後に、少彦名命、行きて、熊野の御崎に至りて、遂に常世国に適しぬ」という一節がある。この熊野を大系日本書紀上の頭注では、「島根県八束郡八束村熊野」のこととしているが、これも、紀伊国の熊野と見なすことが可能であろう。

- (5) 常世国へ渡るにあたって、御毛沼命（三毛入野命）が、「波（浪）の穂（秀）を跳（踏）」んでいくのも、鴻毛でも沈めてしまふ水域に沈まないで渡っていくための一方法と考えられるのである。拙稿（前掲注

(3) 参照

- (6) ニライ・カナイの方向が、必ずしも東方に一定していない。ことについては、次の諸論がある。

①伊藤幹治氏「神話儀礼の諸相からみた世界観」(日本民族学会編『沖縄の民族学的研究——民俗社会と世界像——』)

②丸山顯徳氏『沖縄の民話と他界観』

③前城直子氏「他界の原像——「ニライカナイ」との機能的・構造的対比——」

- (7) 八咫鳥と太陽の関係については、古く谷川士清の指摘があり、最近では、松前健、肥後和男、廣畑輔男氏などに御論考がある。

- (8) 例えば、キリスト教の復活祭イースター(Easter)も、語源は、暁の女神 Eostre から来ており、暁の方向である east と関係深い言葉とされる。つまり、東方と復活という観念が結びついているのである。ヨローバにおける、文学的、宗教的イメージ、シンボルについては、アト・ド・フリース著、山下主一郎氏等訳『イメージ・シンボル事典』や、水之江有一氏編『シンボル事典』等に詳しい。なお、イースターの語源は The Universal English Dictionary に拠る。

- (9) 『日本語をさかのぼる』(岩波新書)。なお、「シは息とか風の意から、方向をいうようになった語」(同書)としているのは、同じ見解が、村山七郎氏『国語学の限界』にも見られ、一般的なものである。

- (10) 水之江有一氏『シンボル事典』、アト・ド・フリース著、山下主一郎他訳『イメージ・シンボル事典』、C・ブラッカー・M・ローウェ編、矢島祐利・矢島文夫訳『古代の宇宙論』、M・エリアーデ著、堀一郎訳『永遠回帰の神話』『太陽と天空神』等に拠る。

- (11) 登岐士玖能迦玖能木実(非時香菓)に不老不死の霊果という性格が見られる点については、拙稿『竹取物語』の「蓬莱の玉の枝」とタヂマ

モリ伝承のトキジクノカクノコノミ」(『静大国文』第三十一号)を参照されたし。

(平成二年二月二十八日受理)